

『サン＝ベルナル書簡集』の構成から見た

サン＝ベルナルの《vita contemplativa》と《vita activa》

中 軽 米 明 子

はじめに

サン＝ベルナル（Bernard de Clairvaux, 1090-1153年）は、シャルトルーズ修道会の友人ベルナル・ド・ポルト（Bernard de Portes, 1152年没）宛の書簡の中で自らを「現代のキマイラ」と形容した。以下その引用である。

「化け物のような私の生活、惨めさに押しつぶされた私の良心は、あなたに大声で訴えかける。実際私は、現代のキマイラ（Chimaera mei saeculi）のようなものだ。聖職者であることもできなければ、俗人であることもできない。というのも私は、修道士の外観を保ちつつも、既に長いこと修道士の本分を捨て去ってしまっているからだ。私は私について、あなたが人々から聞いたと思われることを〔あらためて〕書こうとも思わないし、私が何をしているのか、何に精を出しているのか、どんな危険を冒してこの世に舞い戻ってきたのか、いやむしろどんな深淵を通過してこの世に投げ込まれたのかを〔わざわざ〕書こうとは思わない。もしまだ聞いていないならば、尋ねてみるようお願いする。そしてあなたが聞いたことから判断して、助言と、祈りによる支えとを下さるように」（書簡250番）¹⁾。

1113年、自らの魂を救済するためにこの世を捨ててシトー修道院へ入り、1115年以降、1153年に死去するまでシトー修道会クレルヴォー修道院の初代修道院長であり続けたサン＝ベルナルは、その実、多くの修道院外的事件に介入し、クレルヴォー修道院長時代のほぼ三分の一をクレルヴォーの外で過ごしたと言われている。最初に引用した書簡は、魂にとって危険に満ちているこの世を去り、修道生活に入った自分、従って本来修道士である自分の魂の危険を冒してまでこの世のために尽くし、他方においてそれを快く思っていない者もいることを意識している、サン＝ベルナルの「居心地の悪さ」を表現したものである。観想生活即ち修道生活と修道院外での活動

という対立する二つの生活に引き裂かれた自分を、サン＝ベルナルは、顔が獅子、胸が山羊、尾が蛇であるギリシャ神話の怪物キマイラにたとえたのである。

このキマイラ状態は、今日までのサン＝ベルナル研究が辿ってきた交わることのない二つの道をそのまま予測するものであったと思われる。一方の道は、12世紀の偉大な修道院思想家として、サン＝ベルナルの思想・神学を研究する道であり、もう一つの道は、12世紀前半の政治史的・事件史的側面から、歴史上の人物サン＝ベルナルその人を扱った研究である。前者に関しては、近年ますます研究の具体化・詳細化が見られ²⁾、反対に後者は、19世紀末から一つのサン＝ベルナルのイメージを定着させ、今日に至っているのが現状である³⁾。即ち、「一介の修道院長であるサン＝ベルナルは、修道院の内外を問わず12世紀西欧の教会に関する極めて多くの事件に介入し、大きな影響力を発揮した」というものである。

このサン＝ベルナル像を永きにわたり硬直させてきた史料は、サン＝ベルナルの書簡である。今日550通近くが知られている彼の書簡は、当時の西欧の教会に関する主立った事件の多くに関する情報を提供してくれる。物によってはかなり情報が詳しく、一つの事件を再構成できるほどである故、旧来歴史研究者の間では12世紀に関する第一級の史料に数えられ、非常に便利な証拠として利用されてきたのである。他方サン＝ベルナル研究者にとっては、それらの書簡は、非常に多くの事件にサン＝ベルナルが介入した証拠となる故、「12世紀前半の西欧に強大な影響力を及ぼしたサン＝ベルナル像」というものを定着させるために役立ったのである。

しかし本稿の目的は、むしろこの一見使い旧された史料の分析を通じて、新しいサン＝ベルナル像構築の可能性を探ることである。その可能性は、今世紀『サン＝ベルナル著作集』《Sancti Bernardi opera》を刊行したルクレルクによってもたらされた。彼は、詳細なマニュスクリ研究に基づき、『サン＝ベルナル書簡集』の性格を明らかにした⁴⁾。ルクレルクは、『サン＝ベルナル著作集』全9巻のうち、第7巻と第8巻にサン＝ベルナルの書簡、計547通を収めたが、そのうち書簡1番から書簡310番までを、サン＝ベルナルの存命中に、彼のコントロールの下で編纂された『サン＝ベルナル書簡集』《Corpus epistolarum》に近いものであると断定した⁵⁾。ルクレルクは、中世の書簡及び書簡集一般の性格、書簡集編纂の方法を考慮に入れて、次のように結論付けた。即ち、『サン＝ベルナル書簡集』は、書簡の単なる無作為な寄せ集めではなく、編纂するに当たり、書簡の選別・加筆修正・書簡の配列順序な

ど、入念に考えられ、サン＝ベルナル及び編纂者たちの何らかのメッセージがこめられた人為的・文学的作品を成している⁶⁾。

従って、サン＝ベルナル自身が編纂に携わった『サン＝ベルナル書簡集』《Corpus epistolarum》の中にサン＝ベルナルの様々な事件への介入・解決方法が見られ、彼の思索あるいは長い思想の披瀝があり、他方において、本来いかなるつながりも持たなかった個々の書簡を一つの糸でつなげようとする一つの意志が含まれることを考え合わせると、この『書簡集』を一つの文学作品として読み解くことこそ、サン＝ベルナル研究の交わることのなかった二つの道をついにし、あるいはサン＝ベルナルが自ら嘆いたところのキマイラなる新しいサン＝ベルナル像構築の一助となると思われる。本稿はルクレルク版『サン＝ベルナル書簡集』《Corpus epistolarum》即ち書簡310番までのうち、書簡1番から書簡240番までの分析結果の一部である。それらは、サン＝ベルナルの弟子がローマ教皇エウゲニウス3世（Eugenius III、在位1145-1153年）として登位した、1145年頃までに書かれた書簡であり、この年を、西欧キリスト教世界におけるサン＝ベルナルの権威がピークに達した年とみなし、一区切りとする。

Ⅰ 『サン＝ベルナル書簡集』《Corpus epistolarum》の構成

『サン＝ベルナル書簡集』の構成は、およそ〔付録〕の図のようにになっている。数字は書簡番号である。この番号は、17世紀に『サン＝ベルナル全集』《Sancti Bernardi opera omnia》を刊行したマビヨンによって付されたものであり、ルクレルク版でもこれを踏襲しており、12世紀に編纂された『サン＝ベルナル書簡集』においても、ほぼこの順番で書簡が配列されていたと考えられている。個々の書簡の作成年に関しては、紙幅の都合上ここでは取り上げないが、『書簡集』の構成上はほぼ作成年代順に配列されているとはいえ、数年から5年の幅での順不同はざらである⁷⁾。この大雑把な年代的枠組よりも重要なのは、テーマ別・事件別のまとまりである（以下〔付録〕図の書き込み参照）。

『書簡集』の構成要素として、サン＝ベルナル及び編纂者たちが特に重視したものとしては、第一にローマ教皇在位期が挙げられる。書簡13番、122番、150番、235番、237番がそれぞれ画期を示す書簡となっている。また、特に書簡13番から41番までに見られるように、名宛人が教会ヒエラルキアに占める順位に従って、書簡を配

列するよう配慮されている。

そして何よりもこの『書簡集』は、サン＝ベルナルの活動舞台の漸次的拡大が見て取れるようになってきている。最初に、シトー修道会内部に関する問題を扱っている書簡群が配列され、次いでシトー修道会以外の修道院に関する書簡群が現われ、やがてフランス王国内の教会改革に関する書簡群、次いでアナクレトゥスのシスマに至り、西欧キリスト教世界全体に関する書簡群が配され、ついに彼の弟子がエウゲニウス 3 世としてローマ教皇位に即き、それを祝福する書簡に至るわけである。そして、本稿では扱わないが、サン＝ベルナルが臨終間近の床で書いたとされる書簡 310 番が『書簡集』を締めくくっているのである。かくしてサン＝ベルナルの半生の行動と思索を記録しているこの『書簡集』は、明らかに一つの「サン＝ベルナル伝」と言い得るものを構成している。

以上、『書簡集』の大雑把な構成を見てきたが、次に個々の書簡の内容から、『書簡集』全体を見渡してみる。〔付録〕の図においてイタリックを付されている書簡番号は、修道生活・修道院に関係している書簡を示している。即ち、修道規則・修道院設立・修道院間の争い・俗人有力者及び在俗聖職者たちと修道院との争い等に関する問題、修道生活への勧誘・修道院を保護した俗人有力者及び司教の称賛・宛名人との霊的対話等であり、その中には、修道生活を送る者として、律修聖職者・テンプル騎士修道士関連も含めた、241 通中 113 通即ち約半数がそれに相当する。その他の約半数の書簡は、在俗教会・異端・シスマ等修道院関係外の書簡である。この数字は、明らかに『書簡集』において修道生活がいかに重要な要素を成すものであるかを示していると思われる。

ただし注目すべき点は、図に見られるように、書簡 122 番を境に修道院関係書簡群の配列に変化が見られるということである。書簡 121 番より前の書簡群、そこには明らかに修道院関係書簡が全体的にさほどむらなく見られるが、書簡 122 番以降の書簡群においては、修道院関係以外の書簡が急増しており、しかも修道院に関係ない書簡群と修道院関係書簡群とが交互に配列されているのが見て取れる。この変化は何を意味しているのであろうか。

まず、書簡 121 番までの書簡群の分析結果を述べると、第一に、書簡 1 番から 12 番までの書簡群では、サン＝ベルナルのホームグラウンドであるシトー修道会の厳格な生活の称賛及びシトー修道会内の一致にとって最も重要な概念であるカリタスに

ついて、また、修道士にとって至上命令である従順の義務、定住の義務についてがそれぞれの書簡のテーマになっている。また、観想生活の称賛、サン＝ベルナルの神秘思想の根幹にあるカリタス論の展開など、後の偉大な修道院思想家、神秘思想家の萌芽的思索がこの書簡群に垣間見られる。書簡13番以降の書簡群には、清貧の称賛、修道院の設立、紛争の問題、また修道生活の勧めなどが見られ、サン＝ベルナルの介入がシトー修道会の枠を超え、シトー派以外の修道院にも及んだことが見て取れる。以上の通り、書簡121番までの書簡群が修道生活・修道院に関する様々な理想・問題を呈示しているとすれば、書簡122番からのテーマはどのようなものであろうか。

II 〈vita contemplativa〉と〈vita activa〉

1130年に始まり、約10年近く続いたアナクレトゥスのシスマは、サン＝ベルナルの活動の舞台をフランス王国から西欧キリスト教世界全体へと押し広げることになり、同時に彼が以前にもまして頻繁に修道院外的事件に介入する契機となったが、書簡122番以降に配列されている書簡群は、まさにこうした状況下に書かれたものであり、書簡の配列もその事を明示しているようである。そして後世の歴史研究者たちが、サン＝ベルナルの西欧キリスト教世界における強大な影響力の証拠として特に好んで引用した書簡の多くは、この書簡群の中に見られるのである。それにしてもこの書簡群に見られる修道院外的書簡群と修道院関係書簡群との配列の交互性は何を意味しているのであろうか。その答えはまさに書簡122番の中に見られる。『サン＝ベルナル書簡集』にはめずらしく、この書簡の差出人はサン＝ベルナルではない⁸⁾。これは、トゥール大司教イルドベール・ド・ラヴァルダン（Hildebert de Lavardin、在位1125-1133年）がサン＝ベルナルに宛てたもので、その中でサン＝ベルナルを次のように称賛している。

「芳香はその香りによって、樹木はその果実によって識別されるということを、知らない者はいないと思う。そのように我々もまた、この上なく愛しい兄弟よ、汝の評判によって、いかに汝が聖なる生活を送ってきたか、いかに汝の教えが完全であったかを知ったのである。実際我々が汝から空間的に遠く隔てられていたとしても、汝がどれほど喜ばしい夜々を汝のラケルと共に過ごしているか、どれほど多くの子らが汝にレアからもたらされているか、どれほど完璧に汝は徳の崇拝者であり肉の敵であることを示しているかということが、我々の許にさえ伝わ

ってきたのである」(書簡 122 番)⁹⁾。

この書簡に見られるラケルとレアは、『創世記』第 29 章第 28-35 節に登場するヤコブの二人の妻である。この二人の姉妹は、『ルカ伝』第 10 章第 38-42 節に登場するマルタとマリアの姉妹と同様に、初期キリスト教教父時代から、聖書釈義学上、神への奉仕の二つの生活様式を象徴してきた。ヤコブに愛された美しい妹のラケルは、『ルカ伝』のマリアと共に「観想的生活」(vita contemplativa)を象徴し、ヤコブの最初の妻となった多産の姉レアは、『ルカ伝』のマルタと共に「活動的生活」(vita activa)を象徴している¹⁰⁾。

この二つの生活様式の解釈は様々存在し、サン＝ベルナルが生きた 12 世紀前半においては、同一思想家においてもその解釈は一貫性を持つことは少なく、それでも敢えて支配的であった解釈を整理するならば、大きく二通りに分けられると思われる。その一つは、特に修道院の禁欲業と結びついている解釈である。この解釈によると「活動的生活」とは、悪徳を排除し、徳において進歩し、神へ近づくための日々の禁欲的实践を指す。他方「観想的生活」とは、そうした日々の「活動的生活」の中で時として経験することのできる見えざる神的なものを垣間見、聞こえざる神的な声を聞く沈黙の中の「休息」(quies, otium)であり、真の完全な「観想的生活」はこの世では実現し得ないという考え方も存在した。いずれにせよ二つの生活は、対立するものではなく相補的な関係にあり、束の間の観想の悦びを得るためには、日々「活動的生活」において精進する事が不可欠なのである¹¹⁾。

第二の解釈によると、「活動的生活」とは、隣人を教え導く生活であり、聖職者の司牧活動はこれに属する。他方「観想的生活」は修道士にとって特に可能な生活となる。神への奉仕においてどちらの生活様式が優位に立つかという議論も存在するが、グレゴリウス大教皇(Gregorius I 在位 590-604 年)の影響下、司牧という点からはしばしば、両者の両立が求められている。即ち教会の良きリーダーは、「活動的生活」においてより良き行いをするために、見えざる神的なものを垣間見、その束の間の悦びをエネルギー源として、再び「活動的生活」に戻っていく必要があると¹²⁾。

サン＝ベルナル自身は、この二つの生活様式に関し、体系的な思想を特別に展開してはいないが、『雅歌に関する説教』《Sermones super Cantica canticorum》などでラケルとレア、あるいはマルタとマリアの象徴に言及し、修道士である彼は、前者の解釈即ち修道院の禁欲業と結びついた解釈を展開している。即ち聖なる otium を享

受できるように良き行いや徳の実践に励むべきであり、しかし、ひたすら聖なる休息を求めあまり、「レアの多産さを無視して、ただラケルの抱擁の中に悦びを見出そうとする」ことがないように、「徳を積む前に報酬を要求することのないように」と、二つの生活の相補性を説いている¹³⁾。

しかし、イルドベールの書簡に再び話しを戻せば、イルドベールは明らかに第二の解釈に基づいてサン＝ベルナルを称賛しているのである。彼がサン＝ベルナルの中に見ているのは、グレゴリウス大教皇が理想としていた教会の良きリーダー、「観想的生活」の中で神に対する愛に一層燃え立ち、その愛故に一層多くのものを隣人の教導において産み出すことができるリーダーなのである。サン＝ベルナル自身は、こうした自分の立場をキマイラという怪物に喩えたわけであるが、『サン＝ベルナル書簡集』の中で例外的にサン＝ベルナル本人以外の差出人の書簡が敢えてこの位置に置かれた最大の目的は、修道士サン＝ベルナルが修道院外的事件に関与した事を正当化すること、つまりキマイラ存在を弁護することであったと考えられる。従って続く修道院外的書簡群と修道院関係書簡群の交互の現れは、「活動的生活」と「観想的生活」を交互に繰り返す教会の良きリーダーサン＝ベルナル像を示していると思われる。

図のように書簡122番以降、『サン＝ベルナル書簡集』の中で、アナクレトゥスのシスマ、様々な司教座の空位事件、司教座教会改革、ピエール・アベラル等々の異端問題、そして再び司教座空位事件が次々に展開してゆき、そうした修道院外的事件への介入の間を埋めるように修道院関係書簡が明らかに意図的に配列されていることが見て取れる。

特に書簡124番から149番までは注目に値する。1130年に始まるアナクレトゥスのシスマは、サン＝ベルナルを長期にわたりクレルヴォー修道院から引き離すことになった。シスマを終結させるサン＝ベルナルの努力が書簡124番から140番までの書簡に見られ、続く書簡141番から149番まではすべて修道院関係書簡であり、そのうち最後の三通を除くすべてがシトー修道会関係である。その中でもクレルヴォーの修道士たち宛の書簡143番と144番は、二つの感情の板挟みになっているサン＝ベルナル、即ちクレルヴォー修道院での観想生活から長期にわたり切り離された苦しみと、神の一大事の解決を優先すべきであるという使命感との板挟みになっているサン＝ベルナルの心情を示している。即ち、

「私の意志によるのではなく、教会の必要のために私の帰還が遅れていることを、汝らは怒らずに、むしろ同情しなければならぬ。……この〔不在の〕間、万が一〔靈的〕損失が生じたとしても、それは益とみなされるであろう。なぜならば神の問題であるからだ」(書簡 143 番)¹⁴⁾。

「私にとって唯一の特効薬は、……栄光の神の顔を見る代わりに、……聖なる神の宮、つまり汝らを見ることであった。……この癒しは何度私に中断されたことか……結局私は、自分自身のものを離れ、他人のものを世話するよう強いられており、前者を取り上げられることと、後者に煩わされることのどちらが私にとって耐え難いことであるかは明白である」。「……今私が耐えているすべての労苦において一大事となっているのは、その方のためにすべての者が生きているような方に他ならないのである。望むと望まざると私は、……我々がその方のために何かを耐え忍ぶならば、かの日に報酬を与えて下さる慈悲深く公正な審判者である方のために生きなければならないのである」(書簡 144 番)¹⁵⁾。

かくのごとくサン＝ベルナルは、「観想的な生活」において神的なものを垣間見た束の間の報酬故にますます神への愛に燃え立ち、その神が一大事である時即ち教会が一大事である時に「活動的な生活」へと身と投じたのである。しかし他方において一介の修道院長である彼のこうした活動に対する批判が存在することを意識していた彼は、彼自らのイニシアチブによってこうした生活に身を投じるのではないということを主張している。彼を「活動的な生活」へと駆り立てるのが神への愛であるとすれば、そこへ彼を呼び出すのは、彼の友人たちであるという。サン＝ベルナルはある事件に関し、友人からの介入の誘いを断るに当たり次のように述べている。即ち、

「しかし、と友人たちは言うであろう、必要が大きな、そして重要な〔サン＝ベルナルを呼び出した〕理由であったと。それならば彼らは、重大事を解決するのに相応しい者を求めるべきであった。もしも彼らが私をそのような者であると思なしているのならば、私は自分を決してそのような者であるとは思っていない……。もしも彼らが、まるでこの私が他のいかなる者も成し得ない様な事を成し得るかの様に、重大な不可能事がその方のためにとって置かれているような、そういう人間であると私のことを思なしているならば、私の主なる神よ、あなたの判断は、私に関してだけ誤ったことになるのだろうか？……その者なしでは司教たちでさえその任務を果たし得ないような、俗世に必要な人間を、修道士にし

ようとして……」（書簡21番）¹⁶⁾。

ここに、自らのイニシアチブを否定しながらも、自分は他の人々から教会のリーダー的存在とみなされているという、サン＝ベルナルの自負が見られる。

おわりに

サン＝ベルナルは、『書簡集』を通じて彼のキマイラ状態を弁護し得たのであろうか。「観想的生活」の中から、「活動的生活」をより良く効果的に成し得るための力を汲み出すという、グレゴリウス大教皇が理想とした教会の良きリーダーとしてのサン＝ベルナル像は、ある程度浮かび上がったものと思われる。しかし、グレゴリウスの伝統において問題となっているのは、あくまでも良き司牧者、特に良き司教の養成であり、この目的のために、「観想的生活」に親しんでいる修道士出身者を司教に据えるという現象が生じてきたのであり¹⁷⁾、12世紀前半の西欧キリスト教世界はまさにグレゴリウス大教皇の理想が実現した時代であったと言えるが、サン＝ベルナルの場合は少し事情が違うように思われる。

彼は生涯、約20ほどの司教選挙に介入し、彼の目に相応しいと映った人物を司教位につけており、また約13名のクレルヴォー出身者を司教位につけている¹⁸⁾。そしてついには彼の弟子をローマ教皇位につけるに至っている。これは、いかにもグレゴリウスの伝統に則った方法である。しかし他方彼自身は、生涯4度司教位に選出されているが、いずれも辞退し、結局は生涯クレルヴォーの修道院長という唯一の肩書だけを保持した。12世紀前半に多数輩出した修道士出身司教たちにせよ、律修参事会員たちにせよ、「観想的生活」から豊かさを得た聖職者に他ならないが、サン＝ベルナルは修道士という身分にとどまり続けて「活動的生活」に身を投じたのである。地方のただ一つの教会のリーダーになることによって、彼の「観想生活」で得た力を限られた地域に注ぐよりも、クレルヴォーの修道院長という唯一の肩書故に、むしろ自由に西欧キリスト教世界全体に奉仕することが「観想的生活」をより有効に活かす事ができると考えたのではないかと思われる。この行動の自由と引き換えに、というよりはむしろ少しでも幅広く自らの「観想的生活」で得た富を分かち与えるために、生涯修道士であり続けたことが、サン＝ベルナルをして12世紀前半の西欧キリスト教世界の事実上のリーダーでありながらキマイラという「居心地の悪さ」を表現させることになったのではないかと思われる。

註

- 1) Ep. 250, J. Leclercq, H. Rochais (éd.), *Sancti Bernardi opera* (以下 *SBO.* と略記), vol. 8, Roma, 1977, p. 147.
- 2) この傾向を最も良く示しているのは、1990年にサン＝ベルナルの生誕900年を記念して開催された学会の研究報告書であろう。cf. *La dottrina della vita spirituale nelle opere di san Bernardo di Clairvaux. Atti del convegno internazionale, Roma, 11-15 settembre 1990*, Roma, 1990.
- 3) E. Vacandard, *Vie de saint Bernard, abbé de Clairvaux*, 2 tomes, Paris, 1895.
- 4) J. Leclercq, C. H. Talbot, H. M. Rochais (éd.), *SBO.*, 9 vols., Roma, 1957-1998, 第9巻はインデックスである。なお、ルクレルクのマヌスクリ研究の成果は以下のものに見られる。Leclercq, *Etudes sur saint Bernard et le texte de ses écrits (Analecta sacri ordinis cisterciensis, 9)*, Roma, 1953; id., *Lettres de saint Bernard: histoire ou littérature?*, *Studi medievali*, 12(1971), pp. 1-74; id., *Recherches sur la collection des épîtres de saint Bernard, Cahiers de civilisation médiévale, Xe-XIIIe siècles*, 14(1971), pp. 205-219.
- 5) *SBO.*, vol. 7,8, Roma, 1974, 1977. 12世紀の《*Corpus epistolarum*》の編纂過程に関しては、拙稿『『サン＝ベルナル書簡集』《*Corpus epistolarum*》に関して—新しいサン＝ベルナル像を求めて— (1) (2)』(『史淵』九州大学文学部, 第135, 136輯, 1998, 1999年)を参照。
- 6) 註4)に列挙したルクレルクの諸論文参照。
- 7) 拙稿『『サン＝ベルナル書簡集』《*Corpus epistolarum*》に関して—新しいサン＝ベルナル像を求めて— (2)』に、個々の書簡の作成年を収録。
- 8) 『書簡集』の中で、サン＝ベルナル本人以外の差出人は書簡122番のイルドベール・ド・ラヴァルダン、書簡194番の教皇インノケンティウス2世、そして書簡264番のクリュニー修道院長ピエール・ル・ヴェネラブルの三名のみである。
- 9) Ep. 122, *SBO.*, vol., 7, pp. 302 f.
- 10) cf. P.-M., Guillaume, Rachel et Lia, *Dictionnaire de spiritualité* (以下 *DS.* と略記), t. 14, col. 25-30; A. Solignac, *Vie active, vie contemplative, vie mixte*, *DS.*, t. 16, col. 592-623; A. Solignac, L. Donnat, Marthe et Marie, *DS.*, t. 10, col. 664-673. 特に中世に関しては、G. Constable, *Three Studies in Medieval Religious and Social Thought. The Interpretation of Mary and Martha; The Ideal of the Imitation of Christ; The Order of Society*, Cambridge, 1995, Rep., 1998.
- 11) *Spiritualité cistercienne. Histoire et doctrine*, Paris, 1998, pp. 109-135.
- 12) Constable, *op. cit.*, pp. 20-22; Solignac, *Vie active...*, col. 602-604.
- 13) *Sermones super Cantica canticorum*, 46, II-5, *SBO.*, vol. 2, 1958, p. 58.

- 14) Ep. 143, *SBO.*, vol. 7, pp. 344f.
 15) Ep. 144, *Ibid.*, pp. 344f.
 16) Ep. 21, *Ibid.*, pp. 71 f.
 17) cf. P. R. Oliger, *Les évêques réguliers*, Paris/ Louvain, 1958.
 18) 拙稿「サン＝ベルナル（1090年－1153年）の司教選挙への介入」（『西洋史学論集』, 第33号, 1995年）を参照。

付録 『サン＝ベルナル書簡集』の構成
 (数字は書簡番号, イタリックは修道院関係書簡)

修道生活について (シトー修道会と小さなサークル)

1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12

教皇ホノリウス2世の治世 (1124－1130)

教会ヒエラルキア順

教皇宛 13 14

枢機卿宛 15 16 17 18 19 20 21

司教宛 22 23 24 25 26 27 28 29

教会役職者宛 30

修道士宛 31 32 33 34 35 36

世俗の君侯宛 37 38 39 40 41

教会改革への介入

42 43 44 45 46 47 48 49 50 51 52

修道院の利害援護・修道院問題への介入 (介入の範囲拡大)

53 54 55 56 57 58 59 60 61 62 63

64 65 66 67 68 69 70 71 72 73 74

75 76 77 78 79 80 81 82 83 84 84*bis*

85 86 87 88 89 90 91

イングランドに修道院設立 92 93 94 95 96

97 98 99 100 101 102

修道生活の勧め 103 104 105 106 107 108 109 110 111 112

女性に対する助言 113 114 115 116 117 118 119 120 121

1130年アナクレトゥスのシスマの始まり

122 123 124 125 126 127 128 129 130 131 132 133

134 135 136 137 138 139 140

シスマへの介入期間における修道生活への配慮

141 142 143 144 145 146 147 148 149

教皇インノケンティウス2世の治世 (1130－1143年)

